

(⇒表の右側からの続きです)

「がんばって勉強してるやつだっているんだろう？」

「いる、いる。あんなつまらない、わけのわからないことやってなんになるんだ。苦労しておぼえても、大学にはいったとたんに忘れちゃうだけだ。大学で勉強しても、社会に出て役に立つことなんか、なんかあるのか。」

ぼくは、勉強とかをすることよりも、とにかくどんなことでもいいからがんばることは大切だとは思ったが、言ってもムダだと思って、言わないでおいた。

Aに悪気(ワルギ：意地の悪い心。悪意のこと)はないのだろう。ただ、その時々には思いつくままの行動をしているだけだと思う。ぼくの東京での生活もにたようなものだから、Aのことは悪くは言えないと思っていた。

高校を卒業してから一年後の3月、またAに会った。どこもはいれる大学はなかったようだ。全然勉強していないのだから当然だろう。Aはこう言った。

「おれ、高校の時より勉強しなかった。浪人というのは、こんなにも気楽なものだとは思わなかった。いやなことは一つもやらなかった。やりたいことだけやって、遊んでくらしした。この一年、おれ、すごくもうけた。」

「これから、どうするつもりだ。」

「もう一年浪人してもいいと思ってる。」

「おまえの親は承知(ショウチ：なっとくして聞き入れること)してるのか？」

「今度は東京の予備校へ行って勉強するつもりだ。」

「しかし、東京は金がかかるぞ。」

「この一年だけは、死んだ気でやるつもりだと親に言って、もう一年だけという約束でお金を送ってもらうことになった。」

めずらしく、最後は『もうけた』という言葉がなかったのが、今度はAも本気だと思っていたがとんでもないことだった。

Aが東京へ出てから半年ほどたった時、突然ぼくのアパートにやってきた。

「急に金がいるようになったんだ。10万円ほどかしてくれないか。一か月たったら必ず返すから。」

「いきなりなんだ。いったい何に使うんだ。」

「う～ん、ちょっと。」

Aはそう言ったきり何も言わない。予備校でまじめに勉強しているなら、急にお金がいるようになるわけがない。服装もぼくよりハデだった。東京でも、もうけた、もうけたと言いながら気楽に遊びまわっていたんだらう。そう思ったけど、友達が困ったというので、かしてあげることにした。

その晩、Aはぼくのアパートに泊まった。Aの話の聞くと、すごく変わった感じがした。別の世界に行ってしまったみたいだった。予備校や勉強の話はまったくでなかった。やっぱりお金をかすのはやめようと思ったけど、翌朝、銀行のキャッシュカードで10万円を引き出して、Aにかした。ちょうど月のはじめで、親からの仕送り(シオクリ：生活費などのお金を送ること)があったばかりだった。それでも、10万円はぼくにとってはものすごい大金(タイキン：たくさんのおかね)で、ぼくには4千円しか残らなかった。

その後、1か月間、ぼくはひどい苦労をした。アパートの部屋代をはらえないので、大家(オオヤ：アパートの持ち主)さんに事情を話して待ってもらった。食事は、パンの耳を安く買ってきて、水だけで食べた。それでも、次の仕送りが来る前の3日間は満足に食事ができなかった。その間、Aからは何の連絡もなかった。

(⇒④に続きます あと少しです。頑張って読んでください)